九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

作者兼俳優

進藤, 誠一

https://doi.org/10.15017/2556527

出版情報：文學研究. 35, pp.147-158, 1946-03-30. 九州文學會
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

作者兼俳優

進藤誠一

シェクスピーアが當時のイギリスに於ての第一流の俳優であつたことはよく知られてゐる。モリエールにいたつては、その生涯の大部分は俳優としての、座長としての活動によつて充たされてをり、かれの劇作は一座のレペルトワールを補充するための、やむにやまれぬ必要に促されたものであつた。世界の演劇史の上に比類のない大きな足跡を殘し、今日に於ても全世界が一致して劇文學の双璧と推してゐるシェクスピーアとモリエールとが、二人ながら俳優を業としてゐたといふことは、不思議な偶然といへばそれまでであるが、何か吾々に考へさせるものがあるやうに思はれる。私は仕事がら平生から親しみの多いフランス演劇を中心にして、作者と俳優との兼業について少し考へてみたいと思ふ。

フランス演劇史に於て、作者と俳優とを兼ねてゐたものはさほど澤山には無い。勿論餘技として、悲劇の一篇や二篇を書いたことがあるといふ程度の者まで加へれば相當の數に上るであらう。フランスでは、十七世紀以來十二音綴詩の、五幕の、所謂古典悲劇といふものは、謂はば學校の作文の課題のやうなもので、少し文才のある青年は、たいてい學生時代に一つや二つは書き試みてゐたのである。で、さうした無名の作家は別とし、俳優でありながら、作家としても一家をなしてゐた——たとへ

凡庸作家としてでも――といふ程度の者を拾つてみればその數は決して多くはない。

フランス悲劇の創始者たる名譽を擔つてゐるエチエーヌ・ジョデールは、その處女作悲劇「クレオパートル」が初演された時、みづからクレオパートルの役を演じたと言はれてゐる。しかしこれは本職の俳優といふわけにはいかない。その頃は劇といへば神秘劇か笑劇の類ばかりで、古典悲劇を演ずることのできる本職の俳優などは存在しなかつたのである。そこでジョデールやその友人たちが、臨時の俳優として、主な役々を演じたわけであつた。

本職の俳優として作者を兼ねた者としては、やはりモリエールを嚆矢とするやうである。二十歳前後から俳優となり、巴里で劇場を興したが失敗し、旅役者として十數年のあひだ流浪したが、そのあひだに一座の上演種目の不足を補ふために、イタリア喜劇をしき寫しにしたやうな喜劇を書き試みたのが、地方の見物人になかなか評判がよかつたので、段々と自信を得ていつた。一六五八年に遂に宿望を果して再び巴里に定着することができた。地方で好評であつた「粗忽者」や、「戀の恨み」などの喜劇は、巴里でも大好評を得た。そこでモリエールは愈々自信を得て、忙がしい座長の仕事の閑をぬすんで「嗤ふべき才媛」を書き上げ、これを上演すると、これはまた從來のどの作にも增した大評判となつた。これでモリエールはすつかり一人前の劇作家となつてしまつたのである。その後のかれの生活は、俳優と作家とのなひ混ぜである。しかし、かれの文名は年を追うて高まつたけれども、かれは一座の座長としての、主演俳優としての職務を一日も怠りはしなかつた。最後の作品「氣で病む男」の主役を演じつゝ舞臺に倒れ、遂に起たなかつた。

モリエール一座の強敵であつたブルゴーニュ宮劇場にも、二人の俳優兼作者がゐた。それはモンフルーリ・フィ

スである。（Antoine-Jacob de Montfleury）かれの父親モンフルーリ・ペールはこの劇場で有力な俳優であつた。例のエドモン・ロスタンの「シラノ・ド・ベルジュラック」の中で、シラノにいぢめられるのは、この父親の方のモンフルーリである。父親はこの息子を俳優にする氣は毛頭無く、りつぱな教育をうけさせた。息子も秀才で輝かしい成績で學業を終へ、辯護士の職に就いたが、父親の關係で劇場にしげ〳〵と出入りしてゐるうちに、俳優の生活にあこがれるやうになり、たうとう父親の意に反して、辯議士の職を拋ち、ブルゴーニュ宮劇場にとびこんでしまつた。そして芝居をする傍ら、しきりに喜劇を書いて一座に提供した。その作品はすべて走り書きされたもので、文學的價値は殆んど無いが、上演の成績は相當のものであつた。中でも「裁判官と訴訟人とを兼ねる女」La Femme Juge et Partie は、ちやうどモリエールの「タルチュフ」と同時に上演されたが、モリエールの傑作と伯仲するほどの成功を收めたと言はれる。このほか「嫉妬屋の學校」L'Ecole des Jaloux や、「婦人醫者」La Dame Médecin などが、かれの作品のなかでは、無難のはうである。

モンフルーリは青年時代を過ぎると俳優の生活に嫌氣がさしてきた。かれは宰相コルベールの最負をうけてゐたが、この宰相の内命で、プロヴァンス州の高等法院に對するある重要な使命を果すことに成功し、その褒美として收稅請負事業の重要な椅子につくことになつてゐたが、幸運を眼の前に見ながら、一六八五年に死んだ。

次には、ダンクールがある。（Florent Carton, sieur Dancourt）英國系の血統をもつ小貴族の家柄に生れ、耶蘇會の學校に學び、優良な生徒であつたので、僧職に就くことを奬められたが、これを嫌つて法律を修め、辯護士の資格を得た。ところが十八歳の時、コメディ・フランセーズの名優ラ・トリイヤールの娘テレーズと自由結

婚をしたのが機縁となつて、妻もろともに俳優生活に入つた。もつともその端麗な容姿といひ、その爽やかな辯舌といひ、名優たるべき資格を十分に備へてゐた。かくてダンクールは一六八五年から一七一八年まで、三十三年の久しきにわたつて、コメディ・フランセーズで喜劇俳優として重きをなし、國王ルイ十四世の特別の眷顧をうけた。

その間、かれは約六十篇の喜劇を一座のために書いてゐる。かれの喜劇はいはゆる風俗喜劇の部類に屬するものであるが、しかしモリエールの同種の作品に較べればずつと調子の低いものである。たゞかれは、卑近な、なま〳〵しい事件や人物をとらへて、これを喜劇化することに妙を得てゐる。かれの代表作である「當世好みの騎士」Le Chevalier à la mode の中で、二人の婦人が決鬪をする場面があるが、これはその當時大評判だつた實話をとりいれたものである。かうした、なかば寫實的でなかば冗談めかした、肩の凝らない滑稽がかれの身上で「ダンクール張り」le dancourade といふ特別の名稱ができてゐるのを見ても、かれの作品がその當時いかにもてはやされたか、推量することができる。「當世好みの騎士」に次いでは、「田舍の別莊」La Maison de campagne や、「貴族氣どりの町人女房」La Bourgeoise de qualité などが、秀作である。

十八世紀は素人演劇の大流行をみた世紀であつた。芝居好きの婦人たちは競つて邸内に小さな舞臺を設け、本職の俳優の指導をうけて、招待された觀客の前で悲劇や喜劇を演じて得意になつたものであつた。さうした素人演劇の壓卷は、一七八五年八月十九日に、ヴェルサイユ宮のプチ・トリヤノンで演ぜられた「セヴィルの理髮師」であらう。マリー・アントワネット皇后と、王弟ダルトワ伯と、權臣ド・ヴォドルイユ公とが三つの主役をつとめ、作者ボーマルシェは見物席でこれを拜見したのであつ

た。

かうした風潮の中で、文士、作家たちが舞臺にたつたことは珍らしくなかつたに違ひない。現にヴォルテールの如きは、フェルネーの莊園の壯麗な舞臺の上で、自作の悲劇の主人公を演じて大滿悅であつた。

しかしかうした素人演劇は別とし、本職の俳優で作家を兼ねた者は、十八世紀・十九世紀を通じ、どうも見あたらない。少くともその作品が今日まで傳はつてゐるほどの作家には、俳優をかねてゐた者は無いやうである。

ところが二十世紀に入つて、またぽつぽつ、作家兼俳優が現れ始めてゐる。その一人はサシャ・ギトリ（Sacha Guitry）である。近代フランスに於ける最大の名優といはれるルシヤン・ギトリを父にもち、一八八五年に聖ペテルスブルグで生れたので、ロシヤ臭い名前をつけられたのだといふ。モンフルーリの場合と同じく、父子二代の俳優であるが、息子の方にはむしろ作家としての方が存在がはつきりしてゐる。その作品の數は相當多く、その種類も多種多樣である。有名な才人で、その作品にはフランス趣味の、いな巴里趣味の機智が溢れてゐる。父親の存生中は、父親のために脚本を書いてゐたが、一九二五年に父を失つてからは、みづから一座を率い、專ら自作自演を事としてゐる。私が巴里で觀た「モザール」Mozart は、主役モザールに扮した女優イヴォンヌ・プランタンのすばらしい演戲にもよるが、たいした成功で大變な長期興行ののち、ロンドンまで持越し興行をやつた。少年モザールの巴里滯在中の挿話を主題とし作者の機智的空想をまじへたもので、始終天才少年モザールの卽興の歌が、クラヴサンを伴奏として歌はれ、實に優雅で、感覺的で、本當に樂しいものであつた。

かれの作品はおびただしい數にのぼるが、中でも「パスツール」、「ベラシジェ」、「モザール」などは異色のある作品である。

いま一人はジャン・サルマン（Jean Sarman）である。これはサシャ・ギトリーよりだいぶ若い。一八九八年頃の生れである。國立俳優學校を出て、ジャック・コポーの率いるヴィユー・コロンビエ劇場に入り、アメリカまで巡業に行つたことがある。その旅行中に「紙の王冠」La Couronne de carton ができあがり、これが處女作である。かれの作品は從來のフランス演劇の因習をわざと破つてゐるところが多いので、普通の商業劇場にはむかない。「私は自分にとつて偉大すぎる」Je suis trop grand pour moi はコメディ・フランセーズに採用されたが、そのほかの作品は概ねメゾン・ド・ルーヴル（La Maison de l'Oeuvre）といふ前衛劇場で演ぜられた。そして國立劇場の場合を除いては、みな自作自演である。「オンブルを釣る者」Le Pêcheur d'Ombre「ハムレットの結婚」Le Mariage d'Hamlet「世界で一番美しい眼」Les plus beaux yeux du Monde などの作品がある。

このほかにもル・バルジだとか、ジョールジュ・ベールだとか、アルキイエールだとか一流の俳優で、一つか二つの戯曲を書いて上演されてゐる人たちはあるが、かれらは作家として自他ともに許すといふ域には達してゐない。またエドモン・ロスタンの御曹子のモーリス・ロスタンのやうに、本格的の舞臺を踏んだ經驗をもつ劇作家もあるが、これも玄人俳優と見なされるには程遠い。この程度の人々を捜すならば、十八世紀・十九世紀にも相當あるに違ひないと思はれる。また最近數年間、フランスの消息から全く遮斷されでゐるので、右に擧げた二人のほかに、どんな新人の俳優兼作家が出現したかも知らない。右の兩氏の生死についても知らない。

そこで人の名を擧げるのはこのくらゐにして、これらの典型的な作者兼俳優について、何か共通の特徴を見つけることができるかどうか、それを少し見てみようと思ふ。

右に擧げた作家たちは、いづれもまづ俳優として出發し、次いで劇作に手を染めてゐる。このことに一應注目に値すると思はれる。俳優の技能には非常な修練を必要とするので、所謂中年者には成功の機會が頗る乏しいのである。從つて作家から俳優になる途には大きな困難が横つてゐるわけである。これに反して、俳優は當然演出のテクニックや表現の技術に通曉してゐるのであるから文學的素養のある俳優が劇作の筆をとることには利點こそあれ、さしたる困難は無いわけである。しかしそれにしては作者兼俳優の數が案外に少いのはどうしたものであらうか。勿論第一の理由は多くの人が心身ともに疲勞の烈しい兼業に堪へるほどの精力をもちあはせなかつたといふことであらう。次には多くの俳優に文學的素養が缺けてゐたといふことが考へられる。俳優が一種の藝人として卑まれるといふ因習は、今日に於ても完全に破られてはゐないが、既往に溯るほど、どこの國でもこの傾向はひどかつたのである。從つて貴族階級や上流の町人階級の子弟で俳優になるといふことは全く異例であつた。モリエールにしても、モンフルーリにしても、ダンクールにしても、親たちは息子を俳優にするつもりで立派な教育を授けたのでは決してなかつた。俳優全體としては教養の程度はむしろ水準以下であつたといふのが既往に於ては事實である。

近代にいたつて俳優の教養は一般的に言つてよほど高まつてきてゐる。フランスでは十九世紀以來國立俳優學校（コンセルヴァトワル）が設けられ、殆んどすべての俳優志願者はこゝに學ぶやうになつた。こゝでは技藝のほかに、相當程度の文學的素養が科目となつてゐる。ジャン・サルマンの如きも、こゝで教育をうけてゐるのである。しかし近代に於ても俳優で作者を兼ねる者は甚だ少い。それについては、近代にいたつて作家を業とする者の數が激增し、競爭が烈しくなり、よほど優秀な者か、著しい特徴をもつた者で

ないと、作家として一家をなすことが困難になつた。また俳優といふ職業ではよほど無能な者でも適材適所主義によつて使ひみちがあるので、端役に甘んずる覚悟さへあれば、天分に缺けた者でも生存の餘地があるのであるが、作家には端役や脇役は許されない。また作家には、俳優のやうに旅廻り専門といふやうなことも許されないのである。

このやうに考へてくると、俳優から作家への道にも現實としてはやはり相當の困難があることが分るのである。このことに關聯して作者兼俳優として成功した人々が、概れ一座を率いてゐたか、少くとも一座の勢力家であつたといふ事實がある。モリエール、サシャ・ギトリ、サルマンはいづれも一座を率いてをり、その主演俳優である。モンフルーリは若くして舞臺を去つたので、座長にはならなかつたが、父親のブルゴーニュ宮劇場に於ける地位から推して、御曹子にも相當の勢力があつたものと考へられる。この點サシャ・ギトリの場合もよくにてゐる。かれの父親ルシヤン・ギトリが自他ともに許す大俳優であつたうへに、巴里のルネッサンス劇場の座主でもあつたので、サシャは十九歳で父親の劇場で初舞臺を踏んだ時から、御曹子として特別の待遇をうけてゐた。その後も主として父親と共演し、父の歿後は、自ら一座を率いて主演俳優の地位を占めてゐる。次にダンクールもコメディ・フランセーズの座長ではなつたにしても、喜劇部門での主演俳優であり、國王の寵遇をうけ、そのうへ梨園の名門ラトリイエール家との閨閥もあつたので、座長格の勢力をもつてゐたことが想像される。

このやうに見てくると、これらの人々は自作の戯曲をその一座に上演させるのに好都合な境遇にゐたことが知られる。一般に處女作といふものが缺點の多い、因習を無視したものが多いことを考へると、これらの人々がもしその一座に勢力をもつ俳優でなかつたとしたら、ある

ひは劇作家としての踏み出しがもつと困難であつたかも知れないと思はれる。あるひはもしかしたら、劇作家として認められるに至らなかつたかも知れないと思はれる。つまりこれらの人々は俳優から作者への隘路をとび越えるために惠まれた條件の下にゐたわけである。

但しジャン・サルマンの場合だけは少し事情が違ふ。かれはコンセルヴトワルを出てからジャック・コポーの率いるヴィュー・コロンビエ劇場に入り、コポーの指導のもとに俳優として勉强してゐた。決してかれは一座の有力な俳優ではなかつた。そしてかれの處女作「紙の王冠」は、前衛劇場の一つである「メゾン・ド・ルーヴル」の座長であるルグネ・ポーによつて認められ、その劇場で始めて脚光を浴びたのであつた。しかもかれはその主演をすることを許されたのであつた。かやうにジャン・サルマンだけは、他の人々ほどに惠まれた境遇にゐたとは言へないのであるが、無名作家の發見に異常な熱意をもつポーといふ先覺者に見いだされたのが、かれの幸運であつた。しかしその後はサルマンも一座を率いて自作自演を行つてゐるのであるから、その點かれの先輩である作者兼俳優たちと同じ條件を獲得したものといふべきである。

次に興味のあることは、右の五人のうち四人までが、その妻と一緒に舞臺に立つてゐたことである。モリエールは四十歳を越えてから二十も年下のアルマンド・ベジャールと結婚し、同時にかの女を一座の花形女優にした。しかし間もなくかの女の浮氣な性格が顯著となり、モリエールは家庭に於ても燒餅亭主の役を演じなければならなくなつた。さうした境遇の中でかれは「人間嫌ひ」を書き、コケットなセリメーヌの役を妻のアルマンドにあて、みづから、アルセストに扮してかの女に翻弄される役を演じたのである。まことに微妙にして人間的なモリエールの心理であるが、かうしたことは俳優兼作者にして始めて見られるものと言はねばならない。

ダンクールに就ては既に言つた通りである。むしろかれは妻にひかれて舞臺にとびこんだのであつた。かれの妻はすばらしい美貌と好い聲をもち、戀人役で鳴らしたものださうである。ダンクールと實に好一對の戀人であつたに違ひない。

サシャ・ギトリもごく若い時から細君と共演してゐる。始めの細君はシャルロット・リゼスといつて、達者な、美しい喜劇女優であつたが、程なく離婚した。次の細君イヴォンヌ・プランタンに至つては、サシャの喜劇に無くてはならぬ女優であつた。言ひかへれば、サシャの喜劇の女主公は、いつでもイヴォンヌ・プランタンのコケットな容姿と巧みな歌とを十分に生かすやうに書かれてゐるのである。聞くところによるとサシャは今度の大戰の始まる前の頃、イヴォンヌを離婚したさうである。かれの喜劇が精彩を失ひはしないかと私かに恐れるものである。

ジャン・サルマンについても、ほゞ同樣のことが言はれる。「紙の王冠」以來かれの相手役をつとめてゐるのは、その愛妻マルグリット・ヴルモンである。これはまた金髪碧眼の麗人である。この細君を盲目の役にした喜劇に「世界で一番美しい眼」といふ表題をつけたのである。私はむかし滯佛中、アヴィニョンからカルカッソンヌに行く汽車の中で、巡業中のサルマン夫妻と同車したことがある。他の俳優たちとは別に二人だけ一等車に乘つてゐた。サルマン氏は舞臺で見るよりずつと纖細さのある、神經質な好男子であつた。扮裝してゐない少し旅やつれのしたヴァルモン夫人の美しさも格別であつた。サルマン氏が夫人をいたはる優しい、もの靜かな樣子が、今も眼底に殘つてゐる。

思ふに、觀衆が舞臺に立つ男女が實生活に於て夫婦であることを知つてゐる場合には、一種特別の感興を生ずるものである。そしてその作者が現に男の役を演じてゐる俳優その人であるといふ場合、感興はひとしほ複雜で

ある。かうした興味は演劇に人が求める正統の興味ではないであらう。なぜなら演劇鑑賞はイリュージョンから始まらなくてはならないからである。しかし芝居が面白くてたまらなくなるのは、俳優そのものに對する最負心理が加はつたのちのことだと私は常に思つてゐる。だからかうした感興は正統でないまでも、演劇の本質に屬してゐるものである。そして作者もまたよく觀衆のいだくこの感興を推察し、これを利用することを忘れないのである。モリエールの「人間嫌ひ」や「ジョールジュ・ダンダン」の場合にも、かうした意圖がほの見えるのであるが、ギトリやサルマンの場合に至つては、相當露骨な樂屋落ちが頻りに現はれるのである。試みにごく無邪氣な例をあげてみやう。これはギトリの「ベランジェ」の第一幕で、ベランジェが茶屋女のマリーと口説をしてゐるところである。

ベランジェ——こゝへ來ないか？……おいでよ……そして返事をしておくれ……お前はまだ處女だらうね？

マリー——そんなことどうだつていゝでせう？

ベランジェ——僕は行きさきを知つておきたいんだよ。

マリー——まつすぐにお進みなさいよ、わき見をしずに。

ベランジェ——目をつぶつてかい？

マリー——いゝぢやないの？

ベランジェ——でも、ぶつかつて鼻を怪我したら？

マリー——そんな鼻をしてゐても？

ベランジェ——おや、こいつ、さういふお前の鼻は……

（註、映畫で御存じの方もあらうが、兩人とも鼻の恰好はあまり上等ではないのである。）

かうした對話は作者兼俳優でなくては到底書けるもの

ではない。

さて私は作者兼俳優論の序の口まで來て、既に與へられた紙數に達してしまつた。俳優が作者に及ぼす影響、作者が俳優に及ぼす影響、何故悲劇作者兼俳優が出なかつたか、などの問題には言及することさへできなかつた。これらの問題については、なほもつとよく考へたうへで、次の機會に書かせて戴くことにしたい。